

平成20年度（2008年度）

構造的読解力育成のための

授業づくりに関する研究（国語）

説明文・論説教材において、発達段階に応じた構造的読解力を育成するために、どのような授業課程が必要なのか、構造モデルを具現化する「授業づくり」に焦点を当て、ビデオによる授業研究等取り組みながら、子どもに力をつける授業実践力向上についての研究を深める。

研 究 員

止々呂美小学校	柴 田 正次郎	止々呂美中学校	西 川 ひとみ
萱野小学校	久多里 知 美	第二中学校	牧 戸 大 作
南小学校	福 本 紀 子	第四中学校	富 川 英 子
西小学校	松 本 雅 宏	第五中学校	東 稔 治 義
西南小学校	酒 井 知佐子	第六中学校	三 原 良 子
萱野東小学校	関 野 真 弓		
	中 尾 貞 子		
豊川北小学校	増 山 豊 子		
中小学校	霧 渡 晴 美		
豊川南小学校	三 宅 美 典		

スーパーバイザー

大阪教育大学 住 田 勝 准教授

はじめに

箕面市では、平成20年（2008年）4月、止々呂美地区における校舎一体型小中一貫校「とどろみの森学園」がいよいよ開校した。それにともない、市内全域で校区連携型小中一貫教育が推進されようとしている。各教科において、9年間それぞれの発達段階に応じてどのような力を育んでいくのか、研究がすすめられている。

本研究会は、昨年度の国語科・文学教材（物語・小説）における9年間を見通したカリキュラムづくりに引き続き、説明文教材（説明文・論説文）について、箕面市内各小・中学校14校より委嘱された研究員により、研究を深めることが目的である。

I. 研究テーマ

「国語科における構造的読解力育成のための授業づくりに関する研究」

II. 研究方法

昨年度までは、小・中学校の研究員が共に、小学校教材、中学校教材の研究を深めることから始め、9年間それぞれの発達段階でどんな力を育む必要があるのかについて授業実践を通して検証する手法で研究を進めてきた。また、初等教育・入門期、義務教育・着地点について、育てたい力を想定した授業検証も行ってきた。

今年度は、さらに深めるために設定を物語り文から説明文に移し、9年間の発達段階に応じた読解力構造モデルを意識した教材研究と、授業による検証を行った。

昨年度同様、スーパーバイザーとして大阪教育大学の住田勝准教授を継続的に招き、年間を通してご指導いただいた。

III. 研究内容

月 日	内 容
6月 5日（木）	講話：「H19年度の取組みと今後の研究の方向性」 スーパーバイザー 大阪教育大学准教授 住田勝 氏
7月 1日（火）	構造的読解力育成のための授業づくりの大切な視点とは ビデオによる授業研究から 小学校 第4学年 「ごんぎつね」
7月30日（水）	構造的読解力育成のための授業実践力向上を図る ビデオによる教材研究・授業研究 【西小 松本 T】 小学校 第6学年 「イースター島にはなぜ森林がないのか」
8月20日（水）	前期（小学校1～4年）・中期（小学校5, 6年・中学校1年）グループ交流・教材研究 等 中学校教材 「ユニバーサルな心を目指して」 教材研究

9月 9日 (火)	研究授業に向けた教材研究 小学校 5年 「森林のおくりもの」
10月14日 (火)	研究授業 研究協議 【中小 霧渡 T】 小学校 5年 「森林のおくりもの」 第1時 / 13時
11月20日 (木)	ビデオによる授業研究 小学校 5年 「森林のおくりもの」 第7時 / 13時
1月 6日 (火)	研究授業に向けた教材研究 小学校 4年 「ヤドカリとイソギンチャク」と、「色さいとくらし」の二つの教材の重ね読み
2月 2日 (月)	研究授業 【止々呂美小 柴田 T】 小学校 4年 「ヤドカリとイソギンチャク」と、 「色さいとくらし」の二つの教材の重ね読み 研究授業 【止々呂美中 西川 T】 中学校 3年 「松と杉」
2月 6日 (金)	ビデオによる授業研究 小学校 4年 「ヤドカリとイソギンチャク」と、 「色さいとくらし」の二つの教材の重ね読み 中学校 3年 「松と杉」 読みの能力のステージに応じた9年間の指導案 共有 一年間のまとめ

IV. 研究のまとめ

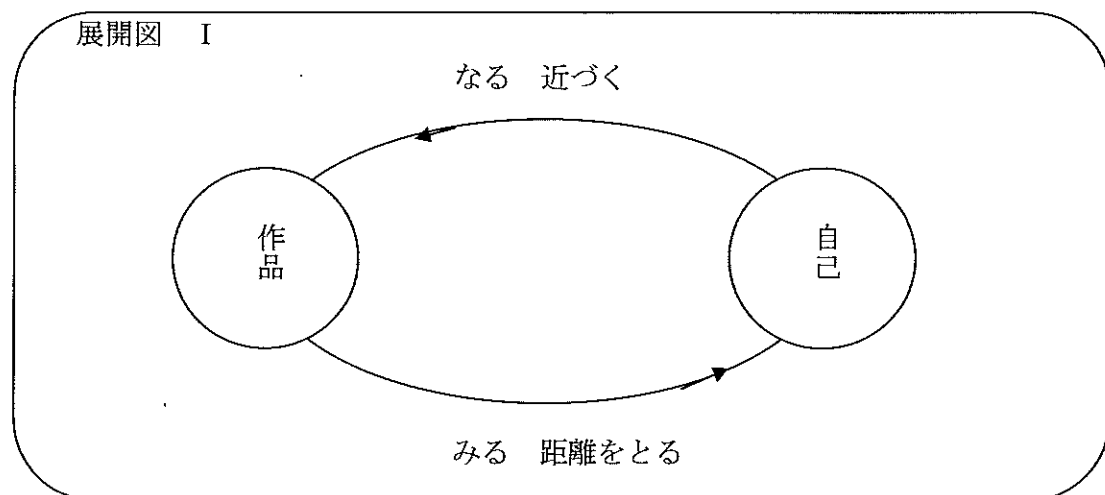
昨年度、1年間のまとめとして、住田准教授より、読解力の構造について、次のような提言をいただいた。

【読みを深めるとは】

文学作品の中の、登場人物に同化する作業から、読者として読み深める様子を、図式化した。

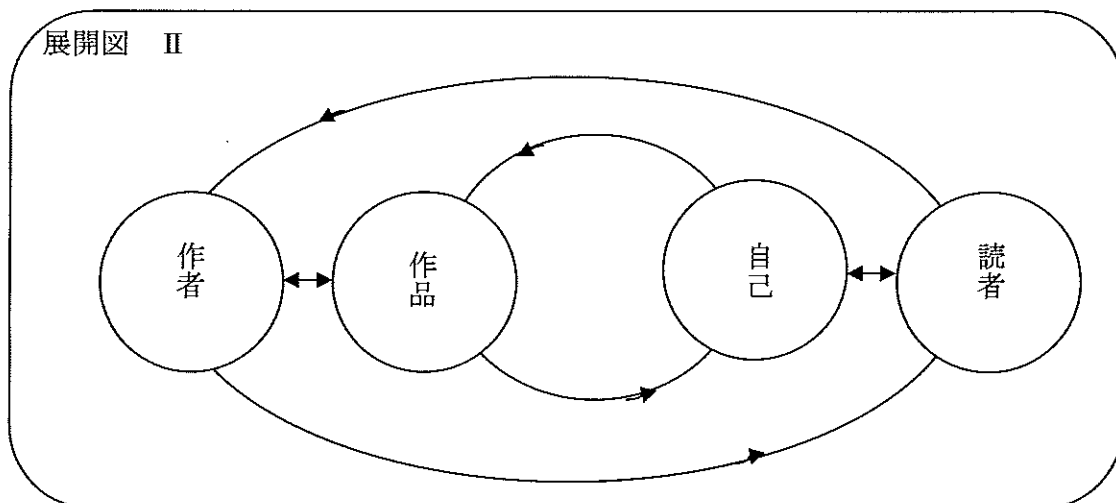
(展開図 1・2)

同様に考えると、説明文においては、内容を読み取るだけではなく、何回も読むことを通して、書かれた文章の向こう側の筆者を見る作業をし、筆者の思いや、それを伝えるための作戦などまで意識することが可能になる。



【展開図1 について】

- ・「なる 近づく」 文学作品などの、登場人物になる、気持ちを想像し、近づく作業を通して、作品を読み深める。
- ・「みる 距離をとる」 作品を構造的にとらえる作業（表現のコントラスト、つながり、繰り返し表現など）を手掛かりとして、その構造をとらえる質問に答えようとして、心情を語り始める。⇒ 作品に近づく。
- ・この作業の繰り返しで、作品を読み深めていく。（小学校4年生ぐらいまでの読み）



【展開図2 について】

- 「なる 近づく」「みる 距離をとる」作業を繰り返すうちに、
- ・構造そのものの意味を問う→その構造を組み立てた作者の意図を見始める。
(作品の向こうの作者を意識し始める。)
- ・作者と対話しながら自分の考えをまとめる。（読者としての自己を意識する。）
- ・内円と外円は、互いに行き来する。

【構造的に読むとは】

どのように文章を読んでいけばよいかを学習する。その学習の仕方である。

説明文では、序論・本論・結論の構造に着目できる感性を育てること。そのために、段落や、まとまりを見分けること、接続詞に気がつくこと。分けたまとまりの型分け、展開の仕方、文章の組み立てが、整理できること。繰り返しや、呼応した部分などを手掛かりに、作者の主張につながる効果を読み取ることなどを、学習する方法である。低学年では、とても短い文章で、その構造を学んでいく。

【なぜ、構造的に読む力が必要か】

構造が捉えられる力と、そこに書いてある情報がわかるということは、表裏の関係である。

情報量が少なく短い文章であれば、構造への感性は低くても、わかる文章はある。しかし、3・4年生ぐらいで学習する一定の長さの文章になってくると、筆者によって工夫された説明文の中身を、情報をとらえて納得するためには、段落を分けて考えるなど、構造が捉えられないと、読むのは難しくなってくる。5・6年生や、中学生が学習するような長い文章になると、途中で文章の何を読んでいけばよいのかわからなくなる。構造をとらえられると、長い文章を分けることができる。分けると、短い文章になり、理解しやすくなる。また、分けたまとまりの組み立てがわかると、理解したものを組み立てて、筆者の意図や、内容を読み切ることが可能になる。これから、まとまった量を読むために、構造的に読む力が必要となってくる。

【授業で構造的に読む力をつける手がかりは】

・分けて考える

序論の後、結論を読んで、問題の提起、解決を読む方法がある。文章の初めと終わりは必ず呼応させようとするので長い文章であればある程有効である。始めと終わりが同じ文章であったり、はじめの問いに対する答えになっていたりする。その見取り図が読めると、はじめと終わりという構成要素を使えるようになる。それが身に着くと本論も何個かに分かれているのではないかと読むようになる。文章を分けるためには、段落や接続詞、話題の変化などをとらえることが必要である。

・「筆者」になっていく体験

読者を説得しようとしたときに、筆者がどのような構造を工夫しているか、どうしてこの表現をしているかを理解して、その向こう側にいる筆者を意識した読みをするために、「筆者」になっていく体験をする。

2年生の教材「いろいろなふね」の、学習の後、「自動車」について、真似て書いてみる。文章の中に、新しい段落を作ってみること。続きの文章を書いてみるなど、わかりやすい形で、「筆者」になってみる活動がある。

「自動車図鑑」を作るなどは、発展した活動のようだが、筆者の書きぶりを真似ていかせ

るような初歩的なレッスンになる。これは、低学年からできる。文章の中に、段落や、接続詞を挿入する学習も、筆者の説明の流れを理解して筆者体験をすることになる。体験をしながら、筆者と対話することができる。

「動物の赤ちゃん」の、結論を書く。「すごいなあと思いました。」と、感想を書くだけでも、筆者になって文章を完成させて、書き手として参加していく営みが、書かれているものに、自分が内容構成筆者とつながって、比べることができる。

・重ね読み

低学年から学習してきた教材を振り返り、重ね読みをすることで、構造を意識できる。

例えば、「ヤドカリとイソギンチャク」は、問題提起・本論・結論の構成だが、本論の展開が、一つ一つ発展していく構成である。それに比べて、「色さいとくらし」は、同じ構成でも、本論の展開は、それぞれの色を並列に展開している。この二つを重ね読みすることで、同じ説明文でも、展開の仕方に違いがあることに気づき、ほかの文章ではどうなのだろうか、既習教材を振り返ることで、今までと違った構造を意識した捉え方ができるようになる。

V. 最後に

構造的にとらえるということを、今までは文学作品で教材研究してきたが、今年度、説明文でどうだろうかと、研究を進めてきた。説明文でも構造をとらえるということは、内容を理解し、筆者と対話していくための避けて通れないものであり、文学作品のそれと、同じような要素が実態に即しながら進められた。今後も、研究を深めてきた発達段階に応じた読解力を育成していくために、「授業づくり」を中心に、子どもに力をつける授業実践力向上についての研究を深める必要があると考えられる。

【資料2】学習指導案

学 年	単 元 名	所 属 校	指 導 者
小学校4年	「ヤドカリとイソギンチャク」と「色さいとくらし」	止々呂美小学校	柴 田 正次郎
小学校5年	「森 林 の お く り も の」	中 小 学 校	霧 渡 晴 美
小学校6年	「イースター島にはなぜ森林がないのか」	西 小 学 校	松 本 雅 宏
中学校3年	「 松 と 杉 」	止々呂美中学校	西 川 ひとみ

国語科学習指導案

指導者 箕面市立中小学校

霧渡晴美

- 一 日時 平成二十年十月二十四日（金）第五時限 一時四十五分～二時三十分
- 二 場所 箕面市立中小学校第五学年一組教室
- 三 学年・組 第五学年一組（三十三人）
- 四 単元名・使用教科書
「森林のおくりもの」（富山 和子）（東京書籍） いろいろな環境問題について調べよう

五 単元目標

―授業改善ガイドラインより―

「読んだこと」を「書くこと」につなげよう

- 文章の読解とともに、文章の組み立てや表現の工夫を読み取り、自分が書くときに生かす。
- 読み取った文章構成や表現の工夫を生かして、自分の課題について分かりやすく書く。

- ・題名の工夫や文章の構成、語句の使い方、文末表現から、表現の工夫や筆者の主張を読み取る。
- ・いろいろな環境問題について、必要な図書資料を選び、主体的に文章を読み、教材文の書かれ方を生かして分かりやすくまとめる。

六 教材観

（一）教材の文章構造上の特徴について

①本教材は、大きく分けて三つの部分で構成されている。冒頭の部分で日本とヨーロッパの文化を比較し、日本の木の文化を理解させる工夫がされている。本論にあたる部分は、前半で木材の素晴らしさや私たちの生活とのかかわりを考えさせ、後半では森林の働きについて考えさせる内容になっている。木の種類とそれぞれの特徴（性質）と使われ方、木の特性と使われ方、森林の働きが具体的な例を挙げて分かりやすく述べられている。結論の部分では、木の恩恵を受けながら生活している私たちが、この「先祖の遺産」を守り続けなければならないという筆者の主張が、強調されている。「おくりもの」が身近な木材から大きな自然としての人類への遺産へと展開し、筆者の最も言いたいことが読み手にしっかり伝わる仕組みになっている。

②全三十九段落の構成。

序論（冒頭部）	形式段落一～五	話題提示
本論（展開部）	その一 形式段落六～二十五	問いかけと説明
	その二 形式段落二十六～三十六	新たな話題提示と問いかけと説明
結論（終末部）	形式段落三十七～三十九	筆者の主張

③冒頭部で、日本とヨーロッパの暮らしを接続詞「けれども」で対比している。

展開部は、最初の部分で「では、どのように使われたのでしょうか。」と問題提起し、木の種類、木の特徴、その特徴を生かした使われ方が順番に述べられている。次の部分では、「くでしょう。」「くではありませんか。」と、読み手に訴えかけ、木が生き続けていることを強調している。最後の部分では、「考えてみたことがありますか。」と問いかけ、「かけがえのない働き」「社会生活に欠かせない働き」と、紙が生活必需品であることを強調している。また、「火を使い続けてきたことでしょうか。」「おくり続けてきたことでしょうか。」と並列で読み手に問いかけ、森林の恩恵を受けてきたことを意識させている。段落二十六でこれまでのことをまとめ、接続詞「けれども」で次の展開につなげている。最後の部分では、「なぜ」「くでしょう。」「くでしょう。」と問いかけ、その後、具体例や仕組みの説明を繰り返している。

終末部は、「森林はだれのおくりもの」と問いかけ、「感謝しなければなりません。」「考えなければなりません。」と、人類に森林を育てる仕事の尊さ、素晴らしさを強調し、義務を示している。読み手に問いかけで展開してきたまとめが義務で終結させている。ここに筆者の強い思いが表されている。

(二)教材の表現の特徴について

①・題名の「森林のおくりもの」と擬人法を用いて、読み手に「おくりもの」とは何だろうと興味を引く仕掛けをしている。また「木は長生きです」「こきめうをしています」のように擬人法を用いて読み手がイメージしやすいように工夫している。

・「くでしょう。」「くでしょう。」と一つ一つ問いかけて読み手の関心をひきつけ、その後、具体例を述べたり仕組みを説明したりしている。

・「くではありませんか。」「くごらんささい。」「考えてみたことがありますか。」「くしてください。」など読み手に語りかける文体で、考えさせたり、様子を想像させたり、説得力を高めたりしている。また、ここには、筆者が木材に対して感嘆していることも読み取れ、筆者と向き合うことができる。

②「例えば」「ですから」「そこで」「くので」が具体例や理由を表し、「さて」「では」が話題の転換を表し、「このように」がまとめを表す。これらの言葉を使うと、書かれていることが整理されて分かりやすい。

(三)その他

①冒頭部の二枚の写真は、日本とヨーロッパの文化を比較するのに効果的である。

②展開部のいろいろな木材については、理解を助けるために木材製品を準備する。

七 児童観

(一)集団の生活の状況および学習の状況

四月当初、私語が多く落ち着かない子どもたちだった。宿題や学習の準備物も忘れる者が多く、授業に支障が出ることもあった。学習面のルールづくりと生活面での意識改革から取り組みが始まった。

まずは、話を聞くこと、話すことができるように、毎朝、席順にスピーチをすることにした。初めは、話し声が小さくて聞こえにくくても、「聞こえません。」と返すことすらなかったが、毎日繰り返すことで、スピーチの内容によっては質問するようになった。また、文章を書くことに慣れたり表現を学ぶために、宿題で教科書以外の読み物を視写させている。これは、読書に興味を持たせる効果もねらっている。もう一つ、毎日、三二日記と称して、短文で生活を書かせている。これも書くことの習慣をつける手段である。

このような取り組みを続けているうちに、授業中ずいぶん集中できるようになり、友だちの発表に回答することが増えてきた。まだ自分の考えを自信を持って発表できない子どもたちが多いので、もっと自由に発言できる学級の雰囲気作りをしなければならないと思う。

(二)本単元の目標に関わっての今までの取り組みと児童・生徒の様子

一学期に説明文教材「動物の体」(増井光子 文)を学習した。動物が出てくるので、子どもたちは興味を持って読み進んだ。しかし、出てくる言葉の中には、難しいものがあり、そのつど辞書を引いて意味を確かめる作業をしなければならなかった。

筆者は、「動物たちがそれぞれの環境に適応しながら生きており、その動物たちの体は、自然が長い年月をかけて作りあげた最高傑作である」という主張を、「動物の体の形・体格・毛皮・体の中の仕組み」の四つの観点で説明している。

文章の構成を理解するために、形式段落ごとにキーワードを見つけたり、要点をまとめたりして段落のつながりを確認していった。授業は、教材文を書き入れたワークシートで進めていった。教材文に自分で書き込みをし、それをもとに発表した。聞き手もどの文からその意見が出されたのか分かりやすかった。発表するときに、自分の意見の根拠の文章を話すようにさせたところ、文章にしっかり目を向けるようになり、筆者の表現や例の出し方の工夫に気づくようにもなった。ワークシートには、自分の考えを書くこともさせた。

子どもたちの中には、まだ一人で要点がまとめられなかったり自分の考えを書くことができなかったりする者がいる。そのような時、グループで話し合うことをした。この活動では、なかなか発表することができない子どもたちも、積極的に発表しようという意欲を見せた。本単元でも、「動物の体」で学習したことを活用したい。

3

八 指導観

本教材を学習後、環境問題について新聞を書かせる予定である。そのために、読み手に興味を持たせる題のつけ方、見出しのつけ方(要点)、話題提示、具体例や説明、自分の意見(主張)の書き表し方をどのようにすればよいか、筆者の論の進め方から学び取らせたい。

(一)「書かれ方」について考え、読み取らせる手立て

- ① 題名のつけ方や書き出しの「日本は森の国、木の国です。」で読み手に「何のことだろう。どうしてかな。」と興味を持たせる表現に注目させる。
- ② 教材文を形式段落ごとに要点をまとめさせる。そのために、各段落がいくつの文でできているか確認し、その中の中心となる文を見つけてさせる。そして、その中の中心となる言葉を使い、体言止めで表現させる。また、文の冒頭の言葉(接続詞など)に注目させ、問いかけ・答え・説明・まとめなどの段落と段落の関係を考えさせる。
- ③ 文末表現「〜でしょうか」「〜じゃない」「〜すぎません」「〜がらす」「〜ばかりです」などや強調表現「にも」に筆者の思いが表れていることを意識させる。
- ④ 写真の効果に注目し、視覚に訴える資料が読み取りの助けになることを意識させる。

(二)「書く」活動の手立て

- ① 教材文を一読した後、「もっと知りたいこと」「よく分からないこと」「驚いたこと」「おもしろいと思ったこと」など印象に残ったことを短く初発の感想として書く。
- ② 段落ごとの要点や筆者の述べ方の工夫を自分の言葉でまとめる習慣をつける。

③ 話題提示・疑問提示（「くでしょう」「くでしょうか。」「くこらんなさい。」）、説明・疑問解決（「例えば」「そのほかにも」「ですから」「くです」「くます」「くでした」）、結論（「このようにくのです」「くならないのです」）の表現を参考に自分の課題を書く。

④ 自分の課題をまとめるときには、なぜその問題を選んだのか思ったことを箇条書きでメモする。そして、メモをもとに資料から必要な情報を書き出す。資料の丸写しでなく、難しい言葉や表現は辞書で調べたりして自分の言葉や表現に直す。

（その他）

自分の課題をまとめるために必要な図書資料やインターネットの情報をを選び、自分の立場からそれらの意見についてどのように考えるか意識して読ませる。そのために、図書資料などをできるだけ多く準備しておく。

九 単元の評価規準

国語に対する関心 ・意欲・態度	○木や森林について関心を持ち、進んで教材文を読もうとしている。 ○いろいろな環境問題について積極的に調べようとしている。 ○ホシ教材で学習した筆者の書き方の工夫を生かして、自分の課題についてまとめようとしている。
書く能力	○読み取った内容の要点や自分の考えを分かりやすく書くようとしている。 ○調べた資料をもとに自分の思いや考えを分かりやすく書くようとしている。
読む能力	○題名や文章表現、文章の構成に注目して、筆者の考え、筆者の思い（気持ち）を読み取ろうとしている。 ○段落の中心語句に注目して要点をとらえようとしている。 ○筆者の考えについて感想や意見を持つようとしている。
言語に関する知識 ・理解・技能	○比喩や対比、強調する言葉、問いかけの文体など筆者の表現の工夫を理解しようとしている。

十 単元の指導と評価計画(全十三時間)

時	児童が学習する内容	「書かれ方」を考えさせる発問	評価規準
第一時 教材について興味・関心を持ち、意欲的に学習するための見通しを持つ。	・気づいたこと、「おくりもの」や「森林」について知っていることや思ったことを発表する。 ・全文通読後、感想を書く。 ・題名について考える。 ・この教材文の学習後、環境問題について調べ、まとめることを知る。	・印象に残っている言葉や文から感想を書いてみよう。 ・「森林のおくりもの」という題からどんなことを思ったか発表しよう。	・印象に残った言葉や表現をもとに感想を短く書くことができる。 【書】 ・森林について自分の知識や意見を話すことができる。【話・聞】
第二時 内容読み取りの準備をする。 話題提示を読み取る。	・全文通読をする。 ・形式段落に番号をつける。 ・難語句について調べる。 ・冒頭の「森の国、木の国です。」(第一段落)からなぜなのかと疑問を持ち、日本人と木のくらしをヨーロッパのくらしと対比させて読み取る。(第二～五段落) ・各段落の要点を書く。	・日本のくらしとヨーロッパのくらしのちがいは何だろう。 ・建物や道具は何でつくられているのか比べてみよう。	・対比に注目して、日本とヨーロッパのくらしのちがいを読み取ることができる。【読】
第三時 問題提起と具体例を読み取る。	・前時の「日本人と木のくらし」を復習する。 ・問題提起を受けて具体例として挙げられている木材の名前・特徴(性質)・使われ方を表にまとめる。(第六段落～第十四段落)	・それぞれの木材がその特徴(性質)を生かしてどんなものに使われたかを表にまとめよう。	・それぞれの木材について、特徴とその特徴を生かした使われ方を読み取ることができる。【読】

第四時 具体例を読み取る。	・木は切られても生きていくということの意味を「呼吸をしています。」「体をふくらませたり、ちぢめたりして」の比喩や二つの具体例から読み取る。 ・木が切られても長生きしていることを「元の姿にもどった」「わかわかしさ」の比喩や具体例から読み取る。 ・具体的な数字から木の長生きを想像する。(第十五段落～第十九段落)	・木が木材になっても生きていくといえる証拠は、どういう例で分かるのだろう。 ・「木は木材になってもまだ生きている。」という文を文中の別の言葉(表現)で言い替えてみよう。 ・木が長生きである例をまとめよう。	・木は木材になっても生き続けることを読み取ることができる。【読】
第五時 具体例を読み取る。	・紙や燃料として使われる木について読み取る。 ・「考えてみたことがありますか。」という問いかけや「かけがえのない働き」「社会生活に欠かせない働き」から、紙と私たちの生活とのかかわりの深さを理解する。 ・「もう一つ、わすれてならない森林のおくりもの」の火がなぜ森林と結びつくのかを考える。(第二十段落～第二十五段落)	・問いかけの文に直線を引こう。また、その答えの部分に波線を引こう。 ・「もう一つ、わすれてならない森林のおくりもの」の例を書き出そう。	・木が、紙や火のように木材以外の使われ方をしていることを読み取ることができる。【読】
第六時 三つの問題提起と答えを読み取る。	・前時までの学習の振り返りをし、「森林のおくりもの」としての「木材」「紙」「火」を確認する。 ・森林の「別のおくりもの」として挙げられている具体例を、問いの文とそれに対する答えを見つけないが読み取り、まとめる。(第二十六段落～第三十六段落)	・問いかけの文に直線を引こう。また、その答えの部分に波線を引こう。	・森林の「別のおくりもの」を読み取ることができる。【読】 ・森林の「別のおくりもの」の三つの例をまとめることができる。【書】

第七時 結論（筆者の主張）を読み取る。（本時）	・筆者の森林に対する思い、考えが分かる言葉や文末表現に印をつけて書き出す。 ・書き出した言葉や文末表現をもとに筆者の主張をまとめる。 ・「森林のおくりもの」と「森林はくおくりもの」の違いを考える。	・「このように」とは、どのようなことをいうのだろう。 ・「くのです。」と「くです。」や「くなりません。」「くならないのです。」と「くます。」では、読み手の受け取り方は変わるだろうか。どちらがうのだろう。	・筆者の主張を読み取ることができる。【読】 ・筆者の主張をまとめることができる。【書】
第八時 筆者の考えについて感想を持つ。	・今までの学習を振り返りながら、感想や筆者への意見を書く。 ・書いたことを交流する。	・「書かれている事がら」「文章表現」「文章の構成」「筆者の考え」について振り返ろう。 ・「森林のおくりもの」という題名の意味を考えよう。 ・筆者の主張について気づいたこと、思ったこと、考えたことを筆者に手紙で出そう。 ・「わたしはくについてくと思います。」「くということからくが分かりました。」と、根拠を挙げて書こう。	・筆者の主張に対して自分の考えや意見を書くことができる。【読】【書】
第九・十時 関心を持った環境問題についての資料の収集、選択、整理をする。	・自分の課題の根拠となる資料を集める。資料から自分の考えの根拠となる事実をメモする。	・調べたいことで疑問に思うことをメモしよう。疑問を解決する事実を見つけよう。	・適切な資料を見つけ、必要な情報をメモすることができる。【関・意・態】

第十一・ 十二時 環境問題に ついて自分 の課題をま とめる。	・筆者の書き方にならつて、自分が調べた事実を資料の根拠をもとにまとめる。 ・書き出しの言葉、問いかけ、事実の例示、自分の考えを下書きする。	・読み手に興味を持たせる書き出しや問いかけを考えよう。 ・事実をどのように並べたら分かりやすいだろうか。 ・自分の考えを事実にもとづいて書こう。「くだからくである」「くはくといえる。」のように文末表現を工夫しよう。	・調べたことを書き方を工夫して自分の言葉で書くことができる。【書】
第十三時 発表と交 流。	・環境問題についての発表をする。 ・互いの発表を聞き、工夫していることなどの感想を出し合う。	・友だちの発表を聞いて、ここが上手だなと思ったことを発表しよう。	・友だちの発表を聞いて、気づいたことを話すことができる。【話・聞】

十一 本時の展開

(一)本時の目標

- ・結論部分を文末表現に着目しながら読み、筆者の主張を読み取る。【読む】

8

時間	○児童の学習内容・活動 ・予想される児童の反応	●指導上の留意点 ★支援 「書かれ方」発問	評価基準と方法
本時のめ あてを確 認する。 (十五分)	○前時までの復習をする。 ・「森林からのおくりもの」は、木材や木の製品や燃料がある。 ・「別のおくりもの」として水や土もある。 ○本時のめあてを確認する。	●前時までの要点を簡単に確認する。	・今までの学習を思い出して、発表することができる。【発言内容】【関・意・態】
	筆者が一番言いたいことはどんなことだろう ○結論部分を音読する。 ・本時の学習範囲に書きこみをする。(分かったこと・すごいと思ったこと・疑問)	・筆者は、自分の考えをどのような言葉でつないでいるだろう。	

- ・読み取った筆者の主張を簡潔に書く。【書く】

結論部 分の内 容を讀 み取る (十五 分)	○「このように」とはどのようなことを指しているのかを考える。 ・今までに出てきた森林のおくりもの全部だ。 ○「森林のおくりもの」と「森林は(だれの)おくりもの」のちがいを考える。 ・「森林の」は森林がいろいろなものをくれるが、「森林は」は、森林そのものがおくりものになっている感じ。 ○文末表現から筆者の考えが分かる文を見つける。 ・「くなりません。」や「くならないのです。」は、強い気持ちが出ているからここのかな。 ○筆者の考え(主張)の根拠となる文を見つける。 ・「先祖たちが植えついでくかけがえのない遺産」や「今もく山々を守っています。」	●「このように」は、前時までの部分全体を指すことに気づかせる。 ★「このように」は、まとめを表すことを確認する。 ●結論では、「森林」がおくりものになっていることに気づかせる。 ★「森林のおくりもの」「森林はおくりもの」を声に出して読み比べさせ、違いに気づかせる。 ●文末表現「くなりません。」「くならないのです。」に着目させ、筆者の強い主張に気づかせる。今まで出てきた文末表現と違う文末表現はないだろうか。 ●筆者の主張とその根拠となる文を探させる。 ★問いかけの後に答えがあることを思い出させ、結論部分の問いの文と答えになる文に線を引かせる。	文末表現から筆者の主張や根拠となる部分を見つけていることが出来る。 【読】(発言内容) 9
筆者の主張をとらえる。 (十五分)	○筆者の主張を一文でまとめる。 ○交流する。 ・「森林はかけがえのない遺産である。」 ・「地球の緑を守らなければならない。」 ・「森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさを考えなければならない。」 ○次時に筆者の主張に対する自分の考えを手紙の形式で書くことを知る。 ○学習を振り返る。	●中心語句を使って簡潔に書かせる。 ★書くことが苦手な児童には、筆者が一番言いたいことの文を書いてもらい、助言する。 ●今日の学習をもとに次時は、筆者の主張に対して自分の考えを書くことを確認する。 ★筆者の主張を一文でまとめたことや「このようにとき」に自分ならこんなことをするという自分の考えを書けばよいことを知らせる。 ●今日の学習で分かったこと、友だちの発表で気づいたことなどを書かせ、次の指導に生かす。	筆者の主張を理解し、簡潔にまとめることができる。 【書】(文)

国語科学習指導案

指導者 松本 雅宏（箕面市立西小学校）

1. 日 時 平成20年（2008年）7月4日（金） 第5校時（13：45～14：30）

2. 学年・組 第6学年1組 36名

3. 単 元 名 「イースター島にはなぜ森林がないのか」（説明文） 鷲谷いづみ ～東京書籍：6年国語（上）～

4. 単元目標

- ・文章の構成を考えて、書かれた内容を読み取る。
- ・根拠を明らかにして、読み取ったことや自分の意見を話す。
- ・筆者の主張や論展開をつかみ、自分の考えをもつ。

5. 指導にあたって

（1）教材について

本教材は、筆者の著書「生態系を蘇らせる」の一部を教科書用に書き下ろしたものである。筆者は、イースター島にかつてあった豊かな森林がどのようにして失われてしまったかを解き明かし、過去の教訓から人類の未来について警鐘を鳴らしている。全部で27の形式段落からなる長文であり、その文章構成も複雑になっている。

これまで子どもたちは説明文の学習において、序論に問題提起、結論にその答えが書かれているという文章構成の教材文を多く学んできた。しかし、本教材の構成は、本論（⑨～⑳）の冒頭に題名である「なぜ森林がないのか」の問題提起があり、その答えが㉑に書かれている。また、結論（㉒～㉓）では「イースター島の歴史から教えられること」について筆者の主張が述べられている。それらは、子どもたちにとってほとんど出合ったことのない文章構成であると思われる。

そこで、まず筆者の考えをおおまかにつかむことからはじめ、文章構成を考えながら読み進めていくことにより、子どもたちの主体的意欲的な学習につながっていくと考えられる。

（2）児童の実態

5年生の説明文の学習においては、先に序論と結論を読むことにより、だいたいの内容をつかんだ上で、接続語や文頭文末の表現を手がかりに意味段落に区切ることを学習してきた。そのことで文章の構成に対する興味や関心が高まってきたと感じられる。また、意味段落の重要な語句（キーワード）や中心となる文章（キーセンテンス）を意識し、それらから要約する力も身につけつつあるようだ。

しかしながら、自分で要約したり、考えを筋道立てて発表したりする力などが十分ではない子どもも少なからずいる。そこで、グループで話し合う時間を大切に、学び合いの中でそれぞれの読みの力を高めていくとともに、友達の意見を聞き、納得したり、違いを感じたりすることで、積極的に発言できるようになればと考えている。

（3）指導について

読みの学習においては、①一人で読む②グループで考えを交流する③話し合いによって読みを深める、という3段階で進めてきている。説明文では、内容を確かに読むとともに、文章の構成をとらえ、筆者の考えや主張を理解することが重要である。

本単元では、まず筆者の考えをおおまかにつかみ、文章構成をとらえさせていきたい。その手だてとして、段落カードを用い、文章を構造化することで内容の確かな理解につなげたい。さらに、段落カードに小見出しをつけたり、まとまりを要約したりする学習に取り組むことで、より確かな読みになると考える。また、筆者の主張や論展開について自分の考えをもつなど、文章を客観的にとらえられるような読み方にも迫っていきたい。

6. 評価の観点

【 関心・意欲・態度 】・進んで読んだり、自分の意見を持って話し合ったりする。

【 話すこと・聞くこと 】・根拠を明らかにし、互いの意見の相違点や共通点をふまえて話し合う。

【 書くこと 】・内容や文章構成、筆者の論について、自分の考えをまとめる。

【 読むこと 】・文章構成をとらえ、筆者の主張や論展開を理解する。

【 言語事項 】・文章にはいろいろな構成があることについて理解する。

7. 単元計画（全9時間） 【本時：8／9】

次	時	主 な 学 習 活 動	評 価 に つ い て
1	① ② ③ ④	<u>文章のおおまかな内容を読む。</u> ・全文を通読し、感想をもつ。 ・形式段落に番号を振る。 ・分からない言葉を調べる。 ・序論・本論・結論に分ける。 ・序論と結論を読み、おおまかな筆者の主張をつかむ。 ・問い(③)と答え(④)を見つける。 ・本論をまとまりに分ける。	・学習に対する見通しがもてる。 ・進んで文章を読む。 ・自分の考えを持って話し合う。 ・指示語や接続語、文末表現について、その働きを理解する。 ・おおまかな内容をつかむ。
2	⑤ ⑥ ⑦	<u>文章構成をとらえ、内容を読む。</u> ・段落④～⑦を読み、内容を要約する。 ・本論(⑤～⑦)の文章構成を考える。 ・段落⑧～⑩の文章を構造化する。 ・段落⑧～⑩を要約する。	・文章構成について考える。 ・述べられている内容について理解する。 ・積極的に意見交流をし、考えを深める。 ・まとまりごとの要約を考える。
3	⑧ 本時 ⑨	<u>筆者の主張をとらえ、自分の考えをもつ。</u> ・結論(⑩～⑪)を読み、内容を要約する。 ・筆者の主張を読み取る。 ・筆者の主張や論展開について、自分の考えをまとめる。 ・学習をふり振り返り、文章構成を理解する。 ・感想・意見を発表し合い、自然と人間について考える。	・筆者の主張を読み取る。 ・文章構成を理解する。 ・筆者の考えに対する自分の意見を持つ。

8. 本時の目標

- ・筆者の主張や筆者の論について、自分の考えをまとめる。
- ・根拠を明らかにして意見交流をし、考えを深める。

9. 本時の展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	備 考
イースター島から森林がなくなった原因を確かめよう		・段落カード
1. 前時までの学習を想起し、 本時の学習内容を知る。	・イースター島から森林がなくなった原因の確認 ・筆者の主張を読むことの確認	
2. ㉔～㉖を音読する。	・指名読みと微音読	
筆者からのメッセージを受け取ろう		
3. 筆者の主張を読み取る。	・中心となる文に線を引きながら考えることの指示 ・机間指導（考えのまとまらない子への助言）	
4. 読み取ったことを話し合う。	・根拠を明らかにして考えを述べるように指示 ① 班（3人組）での意見交流 ② 学級全体でのまとめ	
筆者へのメッセージを書こう		
5. 筆者へのメッセージを書く。	・筆者の主張をふまえて自分の考えを書くように指示 ・筆者の論展開についても意見があれば書くように指示	
6. 考えを話し合う。	・根拠を明らかにして考えを述べるように指示 ① 班（3人組）での意見交流 ② 学級全体でのまとめ	
7. 本時のまとめをする。	・出された意見や考えのまとめ ・次時の予告	